

第二百三十四話 海軍戦史から透けて見えるもの！

大東亜戦争を概観した時に、大陸で陸軍は二進も三進もいなくなり、太平洋正面の海軍作戦に何ら裨益することも出来ず、海軍は太平洋正面で国力の限界を超えた作戦を追い続け、日本海海戦の栄光の再現を求めての艦隊決戦主義に捉われての、戦略なき作戦に終始したとの印象を拭えない。本話では、海軍戦史を通じての小生の偏見と独断の一端を例示したい。

1 連合艦隊と軍令部の力関係の逆転現象の弊害

大所高所から軍略を策定する立場の軍令部の意向に逆らい、時に脅迫して主張を押し付け、或いは無視して唯我独尊の作戦を追求した実働部隊たる連合艦隊との印象が強い。特に海軍第二段・第三段作戦は酷すぎる。山本五十六大将の強烈な個性を筆頭に、連合艦隊首脳陣の罪では？体質的なものを感じるのだが・・・中央の威令行われずとも云える。

2 戦術のみありて、戦略なき海軍

前に出て敵艦隊と相見えることのみを追求し、全般態勢から如何にすべきかの戦略的視点が希薄である。長期持久態勢は海軍には向かない、海軍には防勢的行動はあり得ないとして、連続攻勢、前方決戦に捉われている。また、態勢整理との視点も欠如している。戦術或いは術科に過度に執着し、攻撃は最大の防御、先制・奇襲を金科玉条とする戦術思想は、正に小部隊の戦術・戦闘技術だ。

3 中央協定を無視して敵艦隊を求める弊害

協定で陸軍との協同或いは支援と謳われても、飽くまでも敵艦隊を探し求めるのは如何なものか？ ガ島がその典型例。MIの復讐が主眼だった？

4 作戦失敗責任の有耶無耶と信賞必罰欠如、情実人事の弊害 例え、MI作戦の反省は為されたか？ 陸軍にも同様の罪があるようだが・・・

5 情報の軽視、戦果確認の不十分さ、シーレーン防衛の意識希薄、潜水艦作戦の不徹底、偵察・警戒意識希薄、防護の重要性認識不足等をも指摘されている。

6 驕り症候群と評価する向きもある。呉市民が今度はミッドウェーだと知っていたのはその証左だと指摘、宇垣参謀長の傲岸、勝利病の蔓延等と云われるものもあった。

7 海戦における追撃の不徹底（長蛇を逸する。）ハワイ空襲、珊瑚海海戦、第一次ソロモン海戦等

8 邀撃艦隊決戦主義に凝り固まっていた為に、来るべき対米戦の戦闘様相を見通しえず、洋上航空基地を巡る戦いに後れを取った。抗堪性ある航空基地建設とその防備が疎かになった。陸軍の冷淡なる消極性も問題だが・・・

9 作戦可能な航空兵力や作戦艦艇の推移見積（搭乗員や乗組員をも含む）はどうなっていたのか？余力あるうちに態勢転換すべきだったのでは？無定見に戦力投入を繰り返した付けが来たのではないか？陸戦と海戦には違いがある筈だ。ある段階を過ぎると戦力が急速に減退するのが海空戦だ。戦力の維持・増進、航空消耗戦への対応に課題

10 海軍批判に「大和ホテル」なる言い草がある。武蔵、大和、陸奥、長門、伊勢等々の海軍が誇る戦艦は、日米海戦の帰趨を決めた太平洋南東方面の戦闘に如何なる寄与をしたのか？決勝点に戦力を集中すべきだったのでは。艦艇保全主義と揶揄されても已むを得まい。ハワイ空襲作戦、ガタルカナル作戦、MI作戦、マリアナ海戦、そして栗田艦隊の謎の反転等

若干のコメント

海軍のことを書きながら、陸軍も同罪だなどの感を強くした次第である。大所高所からの判断が出来ずに、政治的リーダーシップが採られないもどかしさを感じる。

(了)